

第4部

1. われ惟う、故にわれ在り

デカルトは、移り住んだオランダで最初に行った省察について語るべきかどうか、大いに悩んだすえに、これを語ることにしました。悩んだ理由というのは、その省察がきわめて形而上学的であり、普通一般から離れているので、全ての人たちの好みには合わないかもしれないと考えたことでした。この決心を促したのは、自分が選んだ基礎が十分に堅固なものであるかどうかを判断してもらうためにこれを語るのが自分の義務であるとの気付きでした。

生き方については、ひどく不確かだと判っている意見でも、疑う余地のない場合と全く同じように、時にはそれに従う必要があることを、デカルトは認めていました。しかし、彼はその当時、ただ真理の探究にのみ携わりたいと望んでいましたので、これと正反対のことをしなければならないと考えたのでした。

即ち、ほんの少しでも疑いをかけうるものは全部、絶対的に誤りとして廃棄すべきであり、その後自分の信念の中に全く疑いえない何かが残るかどうかを、見きわめなければならないと考えたのです。そして、次のようなことを決めました。

- ・感覚は時に自分たちを欺くので、感覚が想像させる通りのものは何も存在しないと想定する。
- ・幾何学の最も単純な事柄でさえ、推論を間違えて過った推論を犯す人がいる訳だから、自分もまた他の誰かと同じように誤りうると判断し、以前には論証と看做していた推理を全て偽として捨て去る。
- ・自分たちが目覚めている時に持つ思考が、全てそのまま眠っている時にも現れうるが、そういったものの中には真であるものは一つもないことを考慮し、それまで自分の精神の中に入っていた全ては、夢の幻想と同じように真ではないと仮定する。

しかし、そういったことを決めてすぐに、重大なことに気が付いたのでした。それは、「このように全てを偽と考えようとする間も、そう考えているこの自分は何ものかではない」ということでした。

そこから生まれたのが、「われ惟う、故にわれ在り（私は考える、ゆえに私は存在する）」という考えです。この考えは、懷疑論者たちのどんな途方もない想定といえども揺るがしえないほど堅固で確実であることをデカルトは確認し、これを真理として、彼が求めている哲学の第一原理として受け入れることができると判断したのでした。

こうした判断の下で、デカルトは多様な側面から自分という存在に対して想いを巡らし、検討を進めました。それは次のようなことです。

- ・どんな身体もなく、どんな世界も、自分のいるどんな場所もないと仮想することはできるが、自分は存在しないとは仮想できない。
- ・自分が他のものの真理性を疑おうと考えること自体から、きわめて明証的にかつ確実に自分が存在するとの帰結が得られる。逆に、自分が考えることをやめるだけで、かつて想像した全てのものが仮に真であったとしても、自分が存在したと信じるいかなる理由も無くなる。

こうしたことからデカルトが知り得たことは、自分は一つの実体であり、その本質ないし本性は「考える」ということだけにある、存在するためにどんな場所も要せず、いかなる物質的なものにも依存しない、ということでした。

従って、この自分をいま存在するものとしている魂（即ち考えるための原理のみを有する精神）は、物体としての身体から全く区別され、しかもその身体より認識しやすく、たとえその身体が無かったとしても、完全に今あるままのものであることに変わりはない、ということでした。

真で確実であると判断できる、「私は考える、ゆえに私は存在する」という一つの命題を見出したデカルトは、この命題の確実性が何によるものかを考えることを通して、一般的に一つの命題が真で確実であるために必要なものを追究しました。

そしてその結論は、自分が真理を語っていると保証するものは、「考えるために存在しなければならないことを、自分がきわめて明晰に分かっている」ということ以外には何も無い、ということでした。

そこから生まれた判断は、「私たちがきわめて明晰かつ判明に捉えることは全て真である」ことを一般的な規則としてよいが、私たちが判明に捉えるものが何かを見極めるのにはいくらかの困難がある、ということでした。

デカルトの追究はさらに続きます。その対象は完全性についてでした。デカルトは疑うよりも認識することのほうが完全性が大であると明晰に捉えていました。そこで、自分が疑っていること、即ち、自分の存在が全く完全ではないことに反省を加え、自分よりも完全である何かを考えることを、一体どこから学んだのかを探索しようとしたのです。

そしてその探索の帰結は、現実に関し自分より完全なるある本性から学んだに違いないという

ことでした。その明証は次のような思考過程を踏んで行われました。

自分の外部にある多くのもの、例えば天空、大地、光、熱、その他無数のものについて自分が持っている観念の中に、これらを完全性において自分より優れたものにすると思われる点があるだろうか、と考えました。その結果は、そのような点は全く見い出せなかったということでした。

そこで彼は次のように信じることができたのです。

- ・それらの観念が真である場合には、自分の本性が何らかの完全性を持つ限り、自分の本性に依存している。
- ・それらの観念が偽である場合には、それは無から来ている。即ち、自分には欠如があるゆえに、その偽の観念が自分の内にある。

ところがデカルトは、自分の存在よりも完全な存在という観念については、そうとは言えないと感じていました。それを無から得る（欠如のある自分が自らそれを得る）のは、無からは何も生ぜずという因果律に照らして明らかに不可能だと確信できたからです。

また、完全性の高いものが完全性の低いものの帰結であり、それに依存するというのは、無から何かが生じるというのに劣らず矛盾していると考えるゆえに、それを自分自身から得ることもできるはずがないと感じていたのです。

こうした思考を経て残ったものは、その観念が、自分よりも真に完全なある本性によって自分の中に置かれた、ということでした。その本性とは、デカルトが考え得るあらゆる完全性をそれ自体の内に具えているもの、即ち、一言で言ってしまうと、神である本性ということでした。

そしてさらに考えを進め、デカルト自身が自分の持たない幾つかの完全性を認識しているということから、次のことを導き出したのです。

- ・自分は、現存する唯一の存在者ではなく、他のいっそう完全な存在者が必ずなければならない。
- ・自分はその存在者に依存し、自分が持つ全てのものはそこから得たはずである。

デカルトの推論は次のようなものでした。

- ・もし自分が唯一のもので、他の全てから独立であるとし、自分が完全な存在者から分け与えられて持っている、このわずかばかりのもの全てを自分自身から得ているとすると、同じ理由で、自分に欠けていると認識する残りの完全性を全て自分から得ることができるはずである。
- ・そうであれば、自分自身は無限で、永遠で、不変で、全知で、全能となり、ついには

神の内にあると認めるあらゆる完全性をもつことができたはずである。

- ・何らかの不完全性を示すものは神の内には一つもない。
- ・例えば、疑い、変りやすい心、悲しみ、および同様のものは、自分自身がそういったものから免れたいと思っているのだから、自分自身が神の内にはありえない。
- ・自分自身は、感覚的で物体に属する多くのものの観念を持っており、知性的本性が物的本性と区別されることを明晰に認識している。そして、これらの観念はこの二つの本性から合成されていると認識している。
- ・合成は常に依存を示し、依存は明らかに一つの欠如であると考えられる。従って神は合成されてはいないし、自分の持っている観念は、神の内にある一なる完全性ではあり得ない。
- ・世界に何らかの物体、あるいは知性的存在者、あるいは他の本性があつて、それらが完全無欠ではないとすれば、それらの存在は神の力に依存しているに違いなく、そうになると、神なしには一瞬間たりとも存続できない。

デカルトは幾何学者が扱う対象にも探求の目を向けました。デカルトは、物体を連続したもの、即ち、際限なく広がる一つの空間と捉えていました。従って、そういう物体はさまざまな部分に分割でき、その部分は形と大きさを色々と変えることができ、あらゆる仕方で動かしたり位置を変えたりできると考えたのです。幾何学者たちは、扱う対象にこうしたことを想定しているという訳です。

こうした考え方の下でデカルトは、幾何学者たちの証明という思考と行動の確実性が、彼が先に語った規則に従って明証的に捉えるということだけに基づいている、と気付きました。そして同時に、それらの証明の中には、その対象の存在を保証するものは何もないことにも気付いたのです。

例えば、三角形の3つの角の和が二直角に等しくなることは確実だと認めることはできますが、この世界にこうした三角形が存在することを保証するものは何も認めることができないのです。

ここまで確かめて、デカルトは完全な存在者についての観念の検討に立ち戻ります。そして、存在が観念の中に含まれていることを見い出すのです。それは、三角形の観念の中に3つの角の和が二直角に等しいということが含まれ、球の観念の中にその全ての部分は中心から等距離にあるということが含まれているのと同じこと、いやそれ以上に明らかなことだと察するのです。

こうして、デカルトは、あの完全な存在者である神が存在することは、幾何学の証明にも劣らず確実であるとの考えに到達したのです。

多くの人たちは、神を認識することにも、自分たちの魂が何であることを認識することにも困難があると思いついていて、デカルトは言います。そしてそれは、そういう多くの人たちが自分の精神を、感覚的な事物を越えて高めることがないからだ、と理由付けています。

そういう人たちは、物質的事物に特有な「イメージを思い浮かべて考える」という思考方法の習慣に囚われているため、イメージを思い浮かべられないものは全て、理解できないのだろうと彼は考えました。神の観念と魂の観念とは、感覚の中には決して無かったのは確かなことです。

そして、そういう人たちに知って欲しいこととして、次のようなことを提示しています。そういう人たちが、神や自分の魂よりも存在が確かだと考えている、例えば身体があるとか、天体や地球がある、といったことがもっと不確かだということです。

私たちは眠っていないながら、自分にはもう一つ別の身体があるとか、現にあるのと違った天体や地球が見えるとか、そんなものは何もないのに、同じように想像することができます。夢に現れる思考が、他の思考に劣らず、しばしば生き生きとして鮮明であることからすると、夢の思考が他よりも偽であることを、何によって判るのか。

どれほど優れた精神の持ち主が存分にこれを研究しても、神の存在を前提しなければ、この疑問を除く十分な理由を一つとして提示できないと、デカルトは主張しました。このように考えますと、先述の、身体があるとか、天体や地球がある、といったことも神の存在を前提しなければ、確かだと言うことはできないことになるのです。

即ち、形而上学的確実性が問題となる時は、理性を外れない限り、以上のようなことに気付くはずだとデカルトは論じているのです。

デカルトが論じていることの背景にあるのは、次のようなことです。即ち、彼自身が規則として定めた「私たちがきわめて明晰かつ判明に理解することは全て真である」ということ自体が、神があり存在すること、神が完全な存在者であること、私たちのうちにある全ては神に由来すること、を基盤にしているということです。

こうした基盤の下に、私たちの観念や概念は、明晰かつ判明である全てにおいて、実在であり、神に由来するものであり、その点において、真でしかあり得ないことになります。私たちの観念が虚偽を含むことがあります、それは、私たちが完全無欠ではないからだ

と理由付けることができます。

こうしたことを知ることになれば、私たちの観念がどんなに明晰で判明であっても、それらの観念が真であるという完全性を保証する理由は、私たち自身の中には無いことを理解することができるはずだという訳です。

神と魂の認識により、この規則、即ち「私たちがきわめて明晰かつ判明に捉えることは全て真である」ことが確実なものとなったうへは、結局のところ私たちは、目覚めていようと眠っていようと、理性の明証性による以外、決して物事を信じてはならないとデカルトは断言します。

彼は、自分が「理性の」と言って、「想像力の」とか「感覚の」とか言っていないことに注意を促します。そして、次のような解りやすい例えを提示しています。

私たちは実に明晰に太陽を見るけれど、太陽が見ている通りの大きさだと判断してはいけない。また私たちは、判明にライオンの頭をやぎの胴体に接ぎ合わせたものを想像できるが、この世にキマイラという怪物がいると結論してはいけない。

即ち、理性は、私たちがこのように見たり想像したりするものが真であるとは、決して教えていないからだということです。しかし理性は、私たちの全ての観念または概念が何らかの真理の基礎を持っているはずだ、と教えてくれるとも言っています。

私たちの推論は、眠っている時には目覚めている時ほど明証的でも完全でもないことは明らかです。そこでデカルトは、完全無欠ではない私たちの思考の全てが真ではあり得ないことを考えれば、思考の持つ真理性は、夢の中においてよりも目覚めて持つ思考において間違い無く見い出されることを、理性が教えてくれると言っているのです。